

～郷土かるたで故郷発見～

を競った。「信濃奇勝録」によると、御射山の神社を中心に御神楽殿などの穂屋が造られ、斜面には、武将の棧敷となる土壇が階段状に造られ、北条・梶原などの武将の棧敷や、信濃侍・甲州侍の大部隊の棧敷も造られた。御射山が山の神の聖地とされたのは陰暦七月の終りに、日・月・星の三光を同時に拝することができたからだといわれる。なお、現在の下社御射山は大社の近くに移動して、霧ヶ峰のものは旧（ふる）御射山と呼ばれている。



き

霧ヶ峰 御射山 古き競技場

霧ヶ峰高原は、古代人にとってこの上もない食料の宝庫であった。矢の根石を産し、梓弓の材料も沢山あった神氏一族はここを御狩野と言って巻狩などを行っていた。またここに山の神を祀って御射山とした。鎌倉時代にはこの御射山に全国の強者どもが集まって、犬追物・流鏑馬などの武技



ゆ

湯の宿場 中山道の下の諏訪

中山道六十九次のうち、下の諏訪宿は湯の町といわれた。江戸と京都を結ぶ官道中山道は、別名木曾街道といわれ、東海道に対する裏街道であった。下の諏訪は和田宿の次の宿であり、諏訪明神の社（春・秋宮）があり、多くの泊り客があった。本陣岩波太左衛門の「かめや」には、西国の藩主や幕府の高官、また貝原益軒・北斎・広重など時の文化人も数多く泊った。天保の頃の記録では、旅籠が四十二軒もあり、客引きが道に立ち、大変賑わったと記されている。女大で有名な貝原益軒は「東山道の記」に「下諏訪宿は和田嶺の坂の下なり、家七百軒ばかりあり、人多く集まり坂の下り口には諏訪大明神あり」と紹介している。また広重もこの旅籠での食事の図を描いている。下諏訪宿は中山道と甲州街道との分岐点でもあった。

諏訪のいろはかるた (5)

全国各地に存在する郷土かるた。多くは絶版となり現在では入手が困難です。ふるさとの財産「諏訪いろはかるた（信濃文化研究会作成）」に詠われたかるたを紹介いたします。

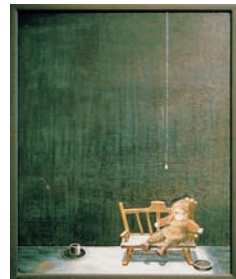


力作、一堂に!



ギャラリ

下諏訪美術展より



今月のおすすめ

～町図書館から～

『もりのなか』

福音館書店



マリー・ホール・エッツ 文絵
まさき るりこ 訳

ぼくは森へひとり散歩にでかけました。森では、ライオンや熊、カンガルーやコウノトリなどに会い一緒に散歩をしておやつを食べ、かくれんぼをし、たっぷりと楽しめます。迎えに来たお父さんの目には見えない動物たち。でもぼくは確かに遊んだのです。作者マリー・ホール・エッツの絵本は、どれも過度の甘さ、子どもにこびた所が一つもありません。そこには、子どもの心の真に響く世界があります。（井出 千穂）

『ボクは坊さん。』

株ミシマ社



白川 密成 著

高野山大学密教学科を卒業し、一度は地元の書店で社員として働く。しかし先代住職である祖父の死により、24歳で四国八十八箇所霊場、栄福寺の住職になったお坊さんの「説法」というより「物語」のような一冊。「生と死」に対する真摯な考えを、弘法大師の言葉を織り込みながら、わかりやすく、おもしろく教えてくれます。著者自身はこの本を「若い坊さんの青春エッセイ」と言っています……。 (酒井 智寿子)



10月の暦 長持ち
八幡武義 作